

## 同一複合名詞のアクセントの融合・非融合の使い分けに影響する文脈的要因 陳曦

日本語の複合名詞には、[ジ'コボ'ーエー]（自己防衛）のようにアクセントが中高型の1単位に融合する（以下、融合アクセント）ものと、[オ'ーザボ'ーエー]（王座防衛）のようにアクセントとして融合しない（以下、非融合アクセント）ものがある。また、「事故防止」の場合、電車内などに流れるアナウンスでは[ジ'コボ'ーシ]（非融合アクセント）と[ジ'コボ'ーシ]（融合アクセント）のどちらの発音も聞くことができる。

ひとつの複合名詞に複数のアクセントがある場合、文脈や使われ方による使い分けがありうるということが指摘されている（NHK 放送文化研究所（編）（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』、郡史郎（2014）「日本語の複合語のアクセントについて—基本原理の再検討と長い複合語への応用—」近畿音声言語研究会 2014 年 4 月月例研究会）。本発表では、一般に後部要素が動作性や状態性をあらわす複合名詞（例：事故防止）について、後部要素があらわす意味[動作性や状態性]に焦点を当てる場合は非融合アクセントをとり、そうでない場合は融合アクセントになるという仮説をたて、その妥当性を聴覚的自然度調査によって検証する。

聴取調査から以下の結果が得られた。アクセント辞典に融合と非融合の両パターンが記載されている複合名詞については、動作性・状態性の弱い文脈（複合名詞の後部要素の意味に焦点を当てない文脈）より、動作性・状態性の強い文脈（複合名詞の後部要素の意味に焦点を当てる文脈）における非融合発音のほうが「自然」であると評価されることが多い。融合発音に対して、「自然」であるという評価は文脈の影響をあまり受けない。この結果から、動作性・状態性の強い文脈、つまり、後部要素のあらわす意味に焦点を当てる文では、非融合アクセント発音の聴覚的自然度に上昇効果があることが確認できた。それを踏まえ、同一の複合名詞の場合、そのアクセントの融合と非融合の使い分けには、焦点の当て方の違い、つまり後部要素の意味を取り立てるか否かが影響しているという考え方を提示する。